

村上英俊の仏学研究の意義

富田 仁

わが国における仏学開祖、村上英俊の業績は数多くの著作と仏学塾達理堂の開塾に代表される。^{〔註〕}すなわち、『三語便覧』(一八五四)『仏英訓辞』(一八五五)『五方通語』(一八五六)『仏蘭西詞林』(一八五七)『英語箋』(一八五七)『一八六三』『仏語明要』(一八六四)『仏蘭西答屈智機』(一八六七)、『西洋史記』(一八七〇)『三国会話』(一八七二)などの著述と一八六八年開設の達理堂における後進の育成の二つは今日では歴史的事実としての価値しかあたえられていないが、その時代的意義はきわめて大きいものであったことを忘れてはならないのである。

村上英俊は一八一一年、下野国那須郡佐々山に生れ、父の松園とともに江戸に出て、津山藩の医者、宇田川榕庵より蘭学を学んだのち、信州松代に移住した。村上英俊が江戸を離れて、松代に移ったのは天保十二年(一八四一)のことであったが松代移住には妹チエが松代藩主、真田豊後守幸良の妾となっていたことと、時代の先覚者、佐久間象山が松代に在住していたこと、その二つが大きく作用していたようである。松代移住後、象山と交際するようになったが、この交友が英俊の生涯を決定することとなった。

象山は天保十三年「佐久間修理書上」を藩主に提出し、海防上、砲台を築き大砲製造の急務を訴えた。当然のこととして火薬の製造も必要であった。当時スエーデンのベルセリウスの『化学提要』がヨーロッパでは高く評価され、ドイツ語やフランス語に訳されていた。英俊は火薬製造で象山に相談を受けたとき、これを取り寄せることにしたのである。オランダ語訳の書物を取り寄せたはずのものが、どのような手違いのためか、実際に入手したのはフランス語訳の書物であった。再注文の余裕もない。象山はフランス語の学習を英俊に奨め、ついに英俊は独学によりその書を読むことになったのである。後年『仏語明要』四冊を著わしたとき、英俊はその凡例の中で仏学軍始の経緯をつぎのように記している。

(前略) 嘉永元年五月初。仏蘭西文典ヲ取テ。之ヲ閲スルコト。五閱月聊カ文法ヲ知ル。故ニ更ニ。別爾撰律私の著書ヲ取テ。之ヲ閲スルニ。一行ヲモ読コト能ハス。遂ニ語書ニ因テ。語ヲ屢索シテ。拮据ヲ深リ。晨夜専意積精スルコト。茲ニ十有六月ニシテ。簿ク読得ルコトヲ得タリ。然レドモ。此カ為ニ。齒痛ヲ患フルニ至レリ。其困苦。言以テ説ク可ラス。筆以テ書ス可ラス。(後略)

文中、別爾撰律私の著者とは前述のベルセリウスの『化学提要』であるが、仏蘭西文典の書名は未詳である。いずれにしても、誰にも教えを乞うこともなく、ひとり未知の言語に取り組む英俊の苦闘の姿は想像にあまりあるものがある。

一八四八年から一八五〇年まで、英俊はオランダ語で書かれていたフランス語文典を頼りにしてフランス語の学習に専念した。その研鑽ぶりはあたかも杉田玄白の蘭学事始にも似た苦闘の姿であった。その結果どうにかベルセリウスの名著を読破することができたのである。英俊が最初は火薬製造のためというきわめて実務的な目的から化学書を読むことになり、その手段のためにフランス語を学んだという事実はきわめて注目されよう。英俊はやがてふたたび江戸に出るようになり、一子栄太郎をえたことで家庭的な安定からくる心の余裕を覚えたためか、ようやく自ら苦心して修めた仏学を広く世の中に伝えようとするようになるが、そのときにはすでに実学としての仏学という要素はかなり喪失していたのであろう。もちろん多くの字書を編纂して後進の研究者の便を計る努力とともに、英俊は弘化元年（一八四四）初めて鐵錫の技術を紹介するなど日本の化学の発展に大きな寄与をなし、蘭学流の化学者が足許に及ばないような業績を出していたことも見落してはなるまい。だが、英俊の存在価値はそうした化学の分野においてよりもやはり仏学の分野においてさらに大きかったのである。それは『三語便覧』一つをとりあげてみても明白な事実と云えよう。

『三語便覧』の成立過程には佐久間家山のいわゆる幻の字書『増訂荷蘭語彙』の感化というものが考えられるようであるが、現在では一つの推定でしかない。いずれにせよ、英俊は自からの仏学研究

の過程で痛切に味わった不便さを後進に嘗めさせたくないという気持で『三語便覧』の編纂を思い立ったのであろう。当時のわが国ではオランダ語は洋学者の大半が修めた言語であり、鎖国中の唯一の公用ヨーロッパ語であった。英語は少数ながら学ぶ者もいたが、フランス語はほとんど皆無というほどこれを知る人がいなかった。だが、フランスが世界の中で占める役割は大きく、その国を知るにはまず最初にその言葉フランス語を知らなくてはならない。英俊はそうした想いに捉えられて、後進の勉学の一助にと字書の編纂を思い立ったのであった。

『三語便覧』初巻の凡例の中で、英俊はつぎのようにその書物の刊行意図を記している。

一、近代西学大開諸家訳書。為初学楷梯者頗多。然為原書楷梯者。尚稀。余因述此書。以便読原書者。初学因此書。闡記仏語。則仏籍可得而読。闡記英語。則英籍可得而読。闡記蘭語。即蘭籍可得而読。進而兼二邦。兼三邦。唯在学者精力如何耳。

(中略)

一、余著此書也。欲便後進博學洋書也。学者勉強而通達于諸洋学。然後。必有大益于天下。是余自隗始之意也。

英俊は前述のようにあくまでも後進の学者、初学者の便宜を考え、英、蘭三方国語の対照字典として『三語便覧』三冊を刊行したが、注目すべきことはそれぞれの単語に片仮名で読みを記したという点である。^(注3) 初巻冒頭に近い個所に記されている若干の語を例示しよう。

フランス語	仏蘭西語	英傑列語	和蘭語
自然	nature	nature	natur
世界	monde	world	wereld

英後のフランス語の発音はオランダ語からフランス語を学んだために不可避的に正確さに欠けた。(注4) 英語の発音にしても、きわめて不正確であり、音声を無視した学習法のもつ大きな欠陥がそこには露呈しているのであった。このことが英後の仏学の致命的な欠陥として英後自身の上にはねかえってくるまでにはまだかなりの日時を要した。すなわち英後は当代一の仏学者であり、発音の不正確さなどは、実際の会話を必要としない状況では少しも問題とならないことであつたのである。英後にはフランス語は結局はフランス語で書かれた書物を読むための手段であつた。さらに云えばフランス語を通じてフランスを知ることが彼のフランス語学習の目的となつていたのであり、フランス語を話すことはその機会もないことからあまり重視していなかつたように考えられる。英後はいわゆる通辞といふような実務に煩わされることのない学者であつた。蘭学を修めて医学を学んだとはいへ、彼は松代藩においても藩医の職に就くことを好まなかつた。つねに学問としての医学であり、蘭学であつたのであり、仏学にしてもそれは同じであつた。フランス語を実際の役に用いることは考えなかつたようである。すでに長崎では本木庄左衛門のような人物も出て、外交の必要上からフランス語が学習されてきたのであるが、英後は多くの仏学書を出すにつれてかえつて世間から遠のくといふ奇妙な破目に陥ちこむのであつた。それもまた英後の仏学研究の態度のせいであつた。

ところで、英後がフランス文典に取り組むようになるちょうど四〇年前、文化五年(一八〇八)二月、長崎の六名のオランダ通辞、石橋助左衛門、中山作十郎、榎林彦四郎、本木庄左衛門、今村金兵衛、馬田源十郎は幕命でフランス語の学習を長崎のオランダ商館長ヘンデレキ・ドウフについて始めることになつたのである。前年、松前に来航したロシア船が残して立ち去つたフランス語の書面を解読できず、長崎に転送し、ドウフにオランダ語に訳させて初めて開港要求の書であつたことを知つた幕府はフランス語の必要性を痛感し、六名の通辞にフランス語学習を命じたのである。通辞見習であつた本木庄左衛門はそれ以前にフランス語を独習していたことをのちに編纂した『仏郎察辞範』の序文に記している。

「小人正栄、曾て此学に志あること期に年あり。常に和蘭人ピートル・マーリンなる者の著す仏郎察語書を取て、傍ら諸書を参考し偶和蘭人の其学を詳にする者に逢えは、叩正質問し、其記すへきものを取て、是を和蘭語に翻定し、稿を為すこと数十巻。」

引用文中の「仏郎察語書」はおそらく一七七五年にアムステルダムで出版された Pieter Marin の "Nieuwe Fransche en Nederduitsche Spraakwijze" を推すものとみられる。

ピーター・マリンの著書を底本として編まれた本邦最初のフランス語文献である『仏郎察辞範』四冊の刊行年月は不明であるが、この字書の編纂を指導したドウフの滞日期間(一七九八―一八一七)を考慮すると、おそらくそれは一八一七年前後の頃と一応の推定が下されるようである。ドウフがオランダ人であつたことからそのフランス語の発音にもオランダ語訛りがあつたことはすぐ察せられるが、英後のフランス語よりははるかにフランス語的であつたことが

考えられる。

本木庄左衛門はフランス語学習の動機をロシア船来航の事件を直接的なものとしていたと云え、前述の序文の中で

「特に仏郎察語の如きに至ては、西洋諸邦、諸厄利亞、魯西亞等に至るまで、通ぜざる所なく、しかも此国語を以て、文章の本宗、言語の大規範となす。しかるゆゑんものは、何ぞや。抑此国、其開闢、各種の国に先だつて、其俗雅に、其風美に、其言語の法則、調句の格例、彼の諸厄利亞等の言語殊離、詞句乖異なるか如きにあらず」

と述べ、フランス語の国際性と優秀性、フランス文化の高尚性が彼をしてフランス語学習にかりたてたのだと説いている。

本木に代表される長崎の通辞たちのフランス語学習はきわめて現実的な外交上の必要から始められたものであったが、結果としてはフランス語のもつ言葉としての美しさ、国際語としての重要性などを認識し、これを修得することに価値を認めるまでになった。英俊と共通することはオランダ語からフランス語に入ってフランス語の本質的価値を認識した点である。

一方、初代駐日フランス公使デュシェーヌ・ド・ベルクールが初めて日本を訪れた一八五九年、宣教師メルメ・ド・カションもこれに同行して来日した。彼は間もなく宣教のために函館に赴いたが、そこで鋤雲栗本貞次郎と日本語とフランス語の交換教授を行なった。一八六二年、江戸に戻ったカションはアカデミー・エトランジェールと称するグループを作り、フランス語を教えた。一八六四年、二代目の公使レオン・ロッシュュが着任し、カションは公使館通弁官となった。ロッシュュは徳川幕府に積極的に働きかけて横須賀製鉄所の

建設を請負ったり、小栗上野介ら親仏派の人物と組み、さまざまな施策を促進し、実行していった。横須賀の大工廠、横浜の小工廠などの建設は幕府の軍事力強化という焦眉の急務にマッチする施策であったが、フランス側としても、東洋艦隊の停泊地の確保という当面の問題をこれによって解決するということで、両者の利害は十分に一致したのである。

横須賀製鉄所の建設には多数のフランス人技術者が来日することとなり、幕府側の関係者もこれと接触する以上フランス語の会話が必要となるので、ロッシュュの建議で横浜にフランス語を教える機関を創設した。横浜仏語伝習所がそれで、酒井飛驒守、栗本安芸守鋤雲が監督に当り、カションを教頭とし、五十七名の生徒を擁して一八六五年三月に開校した。この学校では当然のことながらフランス語の会話に重点がおかれ、通訳の養成に力が注がれたので、フランス人の直接授業で、地理、歴史、数学などが教授された。ロッシュュも来校してフランスの大國なることを語った。この語学伝習所が当時の日本の置かれた国内、国外の情勢を反映して創設されたことを見落してはなるまい。小栗上野介一派はフランスの軍事力を背景にして薩長の勢力を抑え、近代國家に脱皮しようとする意図をもっていたのであり、一八六七年一月にはフランス軍事教官団十五名が来日したのもそうした意図によるものであった。語学伝習所が維新後に陸軍幼年学校の性格をもって再組織されたのも決して偶然ではなかったのである。

村上英俊の仏学研究はこのように長崎の通辞たちのフランス語学習と横浜語学伝習所の創設の間にはさまれて始められたのであったが、結局二つのフランス語学習とは無縁のところでは続けられ

ていたようである。正確に云えば長崎の通辞たちの苦勞は英俊には全然伝えられなかったし、英俊の研鑽は伝習所では徒勞に映じたにちがひなかった。

『仏語明要』は現今の和仏辞書に近いもので、収められている語彙もかなり多い。この辞書の刊行は従来の仏学研究を一步進めたようである。明治四年に松代の兵制士官学校ではフランス語の授業に主要なテキストとしてこれを採用していた。

英俊の仏学研究の普及の功績は辞書の編纂ばかりにみられるのではない。一八六八年深川に私塾達理堂を開いて直接フランス語を教えることになり、林正十郎、小林鼎など、のちに幕府の蕃所調所教授手伝となったような俊秀を門弟に迎えた。一時期ではあったが中江兆民も達理堂に入塾している。英俊の達理堂は蕃書調所とともに当時の仏学研究の主要な機関として注目され、繁盛したようである。蕃書調所の方は純粹な研究機関ではなく、外国新聞、外交文書の翻訳という任務をもっており、そこではきわめて実際のフランス語が求められていた。一方、達理堂ではフランス語の手ほどきに始まり、仏書の講読が授業の中心になっていた。英俊は化学書の講読が得意であった。発音は相変らずオランダ語風であったので、やがて実際にフランス人に接触してその発音を聞く機会にめぐまれた門弟の中から、英俊の発音の誤り、不正確さが批判されるようになる。ついには英俊先生のフランス語はフランス人には通じないという噂さえ立つようになった。門弟は次第に実際フランスの地を踏んで帰国した麟祥箕作貞一郎などの許に去って行った。麟祥は徳川昭武に同行し英仏をまわり、明治元年に帰国し、仏学の大家として名声をえたのであった。英俊が達理堂を閉塾したのは明治十年のこと

で、その晩年は化学の研究、実はヨジウムなど製薬事業で生活の資をえる寂しいものであった。だが旧師英俊の惨めな境遇を知ったかゝる門弟たちの尽力により、英俊は明治十五年暮、東京学士会員に選出され、一躍学界最高の地位をえた。『血液論』の訳述が十六年四月から『東京学士会院雜誌』に掲げられた。さらに十八年八月十八日、英俊は本邦最初の仏学者としてフランス大統領よりレジオン・ドヌール勲章を贈られた。それより四年半後、明治二年一月十日、英俊は黄泉の旅へ赴いた。

英俊の仏学研究は火薬製造のためというきわめて実目的から取り寄せた書物がフランス語で書かれており、これを解読する必要に迫られて始められたもので、本来すこぶる偶然的な動機に基づくのであるが、フランス語学習の苦勞を重ねていく過程でフランスとその言語の国際性、優秀性を肌で理解し、これを生涯かけて研究する道を歩むことになったのである。オランダ語から入ったことで発音の不正確さは否めないが、訳語一つとりあげてもその理解度はかなり高い。英俊は実学としての仏学の人ではなく、本質的に学問としての仏学を修めようとした人であった。実際にフランス人との接触がなかったら、めもあろうが、フランス語を外交、貿易など実務に生かす考えはなく、純粹に学問、研究の手段として使うことに生き甲斐を覚えていたようである。当初、兵学に益するべく始めた仏学であったが、英俊の仏学はつねに学問的であり、外交上の接衝にさえ使われることがなかった。

明治初期には仏学は兵学と法学の二つの分野において存在理由を示していたのであるが、英俊はいずれの分野にも身を置くことのない

かった人であり、あまつさえフランス人との会話に少しも役立たないようなフランス語しかできなかった人であり、急速に近代資本主義国家へと歩まなくてはならなかった時代にあつては、ほとんどまったく過去の人とならなくてはならなかったのである。それは逆の意味で、英俊が本質的には学者であり、純粹に学問的な仏学を修め続けた人であつたことを示しているように考えられるのである。

(一九七一年十一月十四日)

注1 村上英俊に関する研究は少いが、とくに滝田貞治『仏学始祖、村上英俊』(厳松堂)が詳しい。

注2 田中貞夫氏は最近の研究で『増訂荷蘭語彙』の出版計画を英俊が知り、これを『三語便覧』に反映させたと言つて、(村上英俊『三語便覧』成立の一過程)、『比較文学』十四巻)

注3 『三語便覧』は英俊自身の著作一覽に付された広告文によると「此書ハ仏蘭西 英傑列斯和蘭ノ三語ヲ撰集シ彼ノ国字ヲ以テ書記シ其詠法ヲ我が邦字ヲ以テ録スルナリ故ニ如何ナル初学ト雖モ記誦シ易ク速ニ成業スベシ且ツ英語ヲ能ク讀記スルハ英籍ハ勿論米籍ヲモ亦読ム」難カラス故ニ三語ト雖モ笑ハ四国ノ文学ニ通曉セル古今未嘗有ノ珍書ニシテ洋学者ノ奇貨ト謂フベキ者ナリ」と記されている。

注4 『三語便覧』の発音に関する記述は発表当時から批判されるところが多かつたようである。たとえば、佐久間象山は「訛誤以下の外に多く散々なる著述」と批判している。

注5 拙稿『明治期におけるフランス文学(1)』(『明治村通信』十号)参照

注6 拙稿『横浜仏語伝習所』(『明治村通信』十八号)参照

研究余滴 III 八平資盛家歌合(3) V

藤原俊成は、二条天皇期の末、永万頃から歌壇の一方の指導者と目されるようになり、しばしば歌合の判者を依頼されたが、一時期「起請」をして判者となるのをやめていたことがある(御裳濯河歌合判詞・長秋詠藻文治年間歌群・五社百首序)。恐らくこれは、千載集撰集の完成を願つてのことだったと推測される。その千載集撰集の後白河院の院宣を俊成に伝えたのは、頭中将平資盛であつた。寿永二年二月のことである。余滴 I・IIの「資盛家歌合B」は、判者が俊成であるという推測が当たっているとすれば、従つてこれ以前の催といふことになる。資盛が右近中将で蔵人頭に補せられたのは同年正月廿二日のことだから、もし表記が信じられれば、催行の日は極めて狭められるわけであるが、季能卿(叙三位寿永二年四月)・季経卿(同文治五年)という表記は後年(恐らく文治六年)のものであるから、このまま信じるわけにもゆくまい。そこで「寿永三年」が問題となるわけだが、寿永二年七月の平氏都落ち以降にはなるはずがなく、「三」は「元」か「二」の誤まり、字体と事実関係とから(二年の方が都合はよいが)、「元年」と看做してよいかと思われる。ただ、これほど一流歌人を集めた歌合にもかかわらず、同元年十一月成立の「月詣集」に一首の入集も見えない点は注目してよいだろう。起請前の俊成が、最後に判者を勤めたのが、このやがて戦雲迫らんとしていた洛東小松谷の資盛邸における歌合なのであつた。

(松野陽一)